

阿嘉島臨海研究所の 2004年（平成16年）

保坂 三郎
財団法人熱帯海洋生態研究振興財団
岩尾 研二
阿嘉島臨海研究所

The year of 2004 at AMSL

S. Hosaka · K. Iwao

慶良間列島周辺のさんご礁では、依然としてオニヒトデの出現が多い。あか・げるまダイビング協会の献身的な駆除活動にもかかわらず、場所によっては、10分程泳いただけで、10個体以上も見かけることがある。阿嘉島西岸のヒズシでは、ひしめくように岩盤を埋め尽くしていたサンゴ群集が壊滅してしまったエリアもある。いったいつまでこの異常発生は続くのだろうか。親サンゴが激減すると、当然産み出される卵も減り、新たなサンゴの着生量も減少するだろう。すると、荒廃してしまったサンゴ群集の自然回復が遅くなる、あるいはそれが起こらなくなる危険もあり、慶良間のさんご礁が非常に危機的な状況にあるのは間違いない。また、慶良間が沖縄本島周辺へのサンゴ幼生の供給源となっていることは、皆が認めるところであり、本島周辺でのサンゴ群集の復活にも大きなマイナスの影響がでるだろう。

2004年6月28日～7月2日に沖縄で開催された第10回国際サンゴ礁シンポジウム（詳しくは本誌掲載の「第10回国際サンゴ礁シンポジウムと阿嘉島科学巡検」を参照のこと）の公開シンポジウムでは、かねてからの計画どおり三部構成中の第2部は「慶良間列島－沖縄のサンゴ礁保全に向けて」と題されて、慶良間列島を中心としたさんご礁の危機的状況、保全の必要性が発表された。研究者だけでなく、一般の人々も参加する公開シンポジウムという場でこうした話がなされ、慶良間のさんご礁の重要性が広く伝えられたことは、大変価値のあることだったと思う。シンポジウムの討論の中では、海外の著名なサンゴ研究者から、「慶良間海域を特別保全区域に指定すべきである」という提案もあった。

こうした経緯の結果、以前から荒廃の進んでいた

沖縄本島周辺とここ数年大きなダメージを受けている慶良間列島のさんご礁に対する危機感と保全の必要性は、これまでになく高まっている。2004年、阿嘉島臨海研究所では、さんご礁の荒廃状況を知り、その原因を探索するために、サンゴ生息状況のモニタリング調査を行い、水温等環境要因の継続的観測を行った。また、壊れてしまったサンゴ群集を速やかに回復させる手段の一つとして有効な有性生殖を利用したサンゴ群集修復技術を確立させるために、サンゴ産卵調査、プラヌラ幼生の維持実験、稚サンゴ作出実験、サンゴ種苗放流実験などを行った。さらに、一般の人々のさんご礁の状況や生態についての関心を高め、理解を深めるために、さんご礁教室を実施し、教材の工夫・充実に努め、修学旅行や総合学習など学校活動にも協力し、教育・啓蒙活動を行った。このような様々な活動を行うにあたり、多くの人々や組織にご協力いただいた。特に、日本財団には助成をいただき、我々の活動を支えて頂いた。誌面をかりて、同財団のご理解とご協力に感謝申し上げます。

前出の国際サンゴ礁シンポジウムでは、閉会に際して「沖縄宣言」が発せられた。そこでは、現在のさんご礁劣化が危機的状況にあり、その保全と再生のためには科学的研究とモニタリングが必要で、すでに劣化しているさんご礁では科学的根拠に基づいた再生対策を講じなければならない、と述べられている。慶良間は、世界的にも有名で貴重な場所であり、今それがまさに「危機的状況」にある。阿嘉島臨海研究所では、今後益々、科学的研究を進めながら、そのさんご礁の保全と再生を目指して活動していきたい。